近世における貨幣・金融制度の変遷

（日本経済史）

江戸時代の貨幣制度の変遷は、幕府が統一した貨幣体系を構築していく過程であった。鎖国体制の中で貨幣制度を確立していったことは、幕藩体制を維持するために必要であった。また数度の貨幣改鋳をするたびに貨幣の流通を支えたのが両替商であり、そのたびに金融業としての力を付け、金融取引形態が整備されていった。

１）貨幣の変遷：幕府体制の確立のため、新規貨幣を慶長 6 年に慶長金貨が発行される。この時の慶長小判は重量が 17.85g で、品位 84.29%であった。

幕府は金銀銅の主要鉱山を直轄にし、その生産を独占し、諸大名がもっていた貨幣の鋳造、発行権限を幕府に吸収した。金座、銀座、銭座を設けて三種の貨幣を全国に通用させた。金貨では、10 両の大判と 1 両の小判、銀貨には、丁銀、豆板銀、銅貨には一文銅銭が発行された。幕府成立約 30 年後、寛永時代に、「寛永通宝」が大量に鋳造され、貨幣経済への流れが始まる。明暦 2 年には大阪の酒屋であった鴻池一族が両替商を始めた。寛文元年に福井藩に銀札の発行を許可し、全国に藩札として広がり始める。

以下に貨幣の改鋳による変遷を述べる。

貨幣発行から 100 年近くになると損傷や不完全な貨幣が目立ってくる。そこで元禄年間に、幕府は財政難もあり、品位を落として改鋳することにより出目（改鋳差益）を得ることを目的として金座に改鋳をさせた。（元禄の改鋳）元禄小判の重量は 17.85g で、品位は 57.36%であった。

幕府は、宝永 7 年に宝永小判、宝永一分金の鋳造を行う。宝永小判の重量は 9.37g と 50%近く軽量化され、品位は、慶長小判と同じ 84.29%に戻された。（宝永の改鋳）この改鋳は幕府財政の補填が目的であった。貨幣流通量を増加するために、諸藩の藩札を停止したが、米価の急騰をもたらしインフレを生じさせた。

正徳・享保年間にはまた改鋳を行い、趣旨は物価が上昇するようになったため貨幣の品位を慶長期に戻すことであった。改鋳により物価を下げる目的であった。（正徳・享保の改鋳）正徳小判の重量は、17.85g で、品位は慶長期と同じ 84.29%であった。享保 15 年、藩札停止令を解除し、以降領国内に通貨として定着していった。

幕府はまた、元文年間に金銀貨幣の不足を理由に改鋳を行った。元文小判の重量は正徳・享保小判よりも軽量化（13.125g)し、品位も低下(65.71%)した。目的は米価の水準を引き上げることにあった。（元文の改鋳）元文の改鋳により、マネーサプライの増加は大いに経済の拡大をもたらした。これまでの改鋳は幕府の利益目的であったが、今回はデフレ対策という経済対策が大きな特徴である。我が国において初めての貨幣数量調節の行動であった。

米価は一石一両で安定していった。幕府は 2 世紀を過ぎ、文政元年に二分金をはじめ、貨幣の品位を下げて改鋳した。（文政の改鋳）これはまた幕府の費用ねん出の目的であった。文政小判の重量は同じ 13.12g で、品位は元文小判よりもさらに引き下げられ 56.41%、江

戸期の中で最低のものとなった。この改革で新しく二分金、一朱金が発行された。これらは小判、一分金に比べ実質価格が低くなっており、額面で通用する貨幣の兆しであった。

約 10 年後の天保年間に改鋳を行い、(天保の改鋳)天保小判は、更に計量化され(11.25g)、品位は横ばい(56.77%)であった。物価上昇をもたらし、経済の発展に刺激を与えた。

幕末に開港が始まり、内外の金銀比較で乖離がおこり、金貨の流出を抑えるために実施されたのが、安政・万延の改鋳である。小判の品位は一定(56.77%)で、重量は天保期の 11.25g から安政期の 9.0g、万延期の 3.3g と激減する。改鋳の特長は、鎖国時代の閉鎖経済体系下での貨幣制度を開放経済体系に適合させるためのものであった。以上が貨幣の変遷である。

２）金融制度としては、両替商が貨幣の改鋳ごとに新旧の貨幣の両替をした。

江戸中心の東国では「金建」、京阪中心の西国では「銀建」になっており、金貨は両、分、朱による定位貨幣に対し、銀貨は目方による兵糧貨幣であった。金貨と銀貨の交換比率が東西の経済を結ぶ両替相場となり、両替商の大きな役割であった。

また、公儀の両替商として、以下の機能を持っていた。①幕府の御用金に関して出納事務②貨幣の改鋳ごとに新旧の貨幣の交換事務③代官所から畿内 4 か国からの貢租の代金を預かり、江戸で為替で上納する。

元禄 4 年幕府の公金輸送のための大坂御金蔵銀御為替（江戸為替）や享保 8 年の大名為替（江戸為替）など信用制度の確立により為替業務が始まる。

近世全体を眺めると、ある周期ごとに貨幣制度を変えたのではなく、変更した時期は前期の後半と幕末期前半にあったのがわかった。

参考文献：江戸時代における改鋳の歴史とその評価　大塚英樹/日本銀行金融研究所研究第 3 課